



「生駒家系譜」冒頭部分

生駒氏者大和國生駒郷ヨリ  
出ル所之在名也 往昔 染殿  
大政大臣藤原良房公忠仁公也 生  
駒ノ郷ニ居住ス 其子孫 彼郷  
谷口村ニ残り 故ニ生駒ヲ以在名  
トス 其後 尾張國小折村ニ移  
居ス 其年曆 今不詳

生駒氏とは大和國生駒郷出身の在名「住所の地名を取って苗字としたもの」である。むかし、染殿太政大臣藤原良房公（忠仁公）は生駒郷に居住した。その子孫はその郷の谷口村に残ったので、生駒を在名とした。その後、尾張國小折村に移住した。その年曆について詳しいことは伝わっていない。

一、利勝の代に森本惣兵衛に頼んで、和州尾谷村の住人、朴五郎左衛門という者に谷村ママの事を尋問した。その時の返書が次のものである。後世、よく研究し、意義を見出して欲しい。

同不「或は「同外」、どちらも意味不明」谷口殿の宿所跡をお尋ねになれましたが、その時は努力が足りず、分かりませんでした。谷口殿がお移りになった後、谷口村も萩原村と一緒に、領民や家来共々世話になり、跡は田地になりました。ずいぶん昔のことなのでよく分かりません。しかし、谷口殿のお屋敷は今に至るも残っており、谷口殿屋敷と申しております。当国「大和」の氏神は神功皇后で弓矢の神さまでございます。右の通り、御披露してください。恐惶謹言

三月三日

朴五郎左衛門 書判

生駒因幡様御内

宮崎吉右衛門様

一 利勝代ニ森本惣兵衛ニ頼テ

和州尾谷村之住人朴五郎左衛門

ト云者ニ谷村之事ヲ尋問ス其

時返牒如左 後世 猶可温之

同不(同外カ) 谷口殿ハ宿跡御尋ニ成候ヘ共

其時分不存候間 無其儀候 谷口

殿御所替被成候後 谷口村も

萩原村江 一所ニ百姓家来共ニ

立寄候而跡ハ田地ニ仕候 久敷成

申故 知不申候 乍去 谷口殿御

屋敷ハ于今残し置 谷口殿

屋敷ト申候 御本国御氏神ハ

神功皇后ニ而弓矢神ニて御座候

右之通 御披露 可成候 恐惶

謹言

朴五郎左衛門

三月三日

書判

生駒因幡様御内

宮崎吉左衛門様

生駒左京進

一

家廣

此人文明明応之頃 既ニ小折ニ

居住ス

一(代) 生駒左京進

家広

この人は文明・明応(一四六九〜一五〇二)の頃に、既に小折に居住した。

一、文亀元年(一五〇二)辛酉 月八日に亡くなる。鉄船常横大禅定門と号し、小折村の慈雲山龍徳寺に葬った。

永禄九年丙寅(一五六六)、寺号を嫩桂山久昌寺

と改めた。

一、久昌寺の古い鐘の銘文は次の通り。「本願主生駒左京進家広、漸満十方檀那勧進至求之也、尾州丹羽郡稻木庄柳橋郷小折村慈雲山龍徳寺鐘仍以、于時明応六丁巳十二月吉日、大工羽黒南金屋 太郎左衛門尉 藤原宗次」[本願主、生駒左京進家広、漸く十方の檀那の勧進を満たし、これを求めるに至るなり。尾州丹羽郡稻木庄柳橋郷小折村慈雲山劉徳寺の鐘、仍って以てす。時に明応六丁巳十二月吉日、大工羽黒南金屋 太郎左衛門尉 藤原宗次]

二(代) 生駒加賀守

豊政

小折村に居住した。織田十郎左衛門信康の陣営に味方し従った。

一、大永三年癸未(一五二三)八月二十日に亡くなる。梅岩常芳大禅定門と号し、龍徳寺に葬った。

一、生駒雅楽頭の先祖、道樹は元来、美濃国土田村の住人であった。

一文龜元年辛酉 月八日卒 號

鐵船常横大禪門 葬於小

折村慈雲山龍徳寺 永祿九年  
丙寅寺号

改藏桂山  
久昌寺

一久昌寺古鐘之銘文 左如

本願主生駒左京進家広漸満

十方檀那勸進至求之也

尾州丹羽郡稻木庄柳橋郷小

折村慈雲山龍徳寺鐘仍以、

于皆明応六丁巳十二月吉日

大工羽黒南金屋 太郎左衛門尉 藤原宗次

二 生駒加賀守

豊政

小折村<sub>ニ</sub>居住ス 織田十郎左衛門

信康幕下<sub>ニ</sub>與准ス

一大永三年癸未八月廿日卒 號

梅岩常芳大禪定門 葬龍徳寺

一生駒雅楽頭先祖 道樹ハ元来 美

濃国土田村之住人也 織田朴岩<sub>信康</sub>

<sub>ニ</sub>仕ヘテ武功有リ 故<sub>ニ</sub>朴岩ノ命ヲ以テ

豊政之猶子トシテ生駒氏ヲ讓<sub>ル</sub>所也

是故<sub>ニ</sub>彼家<sub>ニ</sub>於テ豊政ヲ以元祖トズ

其後 生駒平蔵 道壽之長子 主

織田朴岩信康に仕え、武功を挙げたので、朴岩の命令により、豊政の猶子（養子）として生駒の氏を譲ったのである。こうした理由であの者の家では豊政を先祖とした。その後、生駒平蔵が、道壽の長男、主殿助の婿となった。あの者とはここで当家と由緒ができたので、あの者の家系をここに載せる。但し、諸家系譜に載っているものをここに記した。

一、この系図の内、「豊政「親政の誤りカ」の母は家広の娘」云々とあるが、当家には、そういった話はなく、それが真実なのか否かは分からない。

一、この系図では源氏となっている。道壽の本実「本貫の誤りカ、本籍の意」の姓を言っているのであろうか。またこれも分からない。

（生駒雅楽頭家系 省略）

三（代） 生駒蔵人

家宗

小折村に居住した。弘治二年丙辰（一五五六）二月十三日に亡くなる。花岳玄通大禪定門と号し、龍徳寺に葬った。

一、妻は美濃国曾根の屋形の娘、西尾隠岐守と同母である。

四（代） 初めは昌利、生駒八右衛門尉

家長

織田信長に仕えた。後、信雄に仕え、勢州河内の城代を勤め、その近辺二三郡の代官所も預かったと云う。信長の近習に「黒角青の士」十人がいたが、その一人である。後、秀吉公にも仕えたの

殿助婿トナル 彼是ニ付テ当家  
由緒有リ 故ニ彼家系 此ニ載之  
但諸家系譜ニ載ル所ヲ以記之  
一此系之内 豊政母ハ家廣女ト云々 当  
家ニ於テ所見ナシ 其実否 今不可知  
一此系源氏トス 道壽本實之姓ヲ  
以テ称之歟 亦不知之

(生駒雅楽頭家系 省略)

三 生駒藏人  
家宗

小折村ニ居住ス 弘治二年丙辰二月  
十三日卒 號  
花岳玄通大禪定門葬龍徳寺  
一妻ハ美濃国曾根ノ屋形ノ女 西尾隠  
岐守同腹也

某 生駒兵之助 早世

四 初昌利 生駒八右衛門尉

家長

織田信長ニ仕 後 信雄ニ仕 勢州  
河内之城代相勤 其近辺二三郡ノ  
代官所ヲモ預ル由 信長近士ニ黒角  
冑之士十人アリ 其一人也 後 秀吉公ニ  
モ仕 故ニ領地之朱印 秀吉公ヨリモ賜ル

で、領地の朱印状は秀吉公よりも賜った。

一、織田十郎左衛門信清と織田伊勢守信安と尾州浮野村で戦った時、信清に味方して溝川を挟んで敵と戦い、首級を挙げた。

一、同国小口村の合戦の時も、先駆けして銃弾に当たった。

一、永禄四年酉（一五六一）五月十三日、濃州森部で織田信「長」公に従い、斎藤龍興の軍と出会い、永井甲斐守と力戦した。

一、元龜元年（一五七〇）六月江州浅井郡で、佐々内蔵介に加勢して軍功を挙げた。

一、元龜四年「元龜元年の誤り」越前国金ヶ崎の陣のときに、矢に当たると号した。

一、天正一六年「天正一八年（一五九〇）の誤り」小田原へ出陣した。

一、文禄四年（一五九五）隠居して名を玄球と改めた。

一、慶長十二年丁未（一六〇七）正月七日に亡くなる。源庵常本居士と号し、小折村嫩桂山久昌寺に葬った。

女子

初めは何某弥平治に嫁いだ。後に織田右府「右大臣、信長」の室となり、尾州小牧に住んだ。

一、永禄九年寅（一五六六）五月十三日に亡くなる。久庵桂昌大禅定尼と号し、小折久昌寺に葬った。

一 織田十郎左衛門信清ト同 伊勢守信安ト

於尾州浮野村合戦之時 信清之味

方ニテ溝川ヲ隔テ鎗ヲ合セ首級ヲ得

一同国小口村合戦ノトキモ先登ニ進テ銃子ニ中ル

一 永祿四年酉五月十三日濃州森部ニテ

織田信長公ニ随 斎藤龍興之軍ニ会シ

永井甲斐守ト力戦ス

一元龜元年六月江州浅井郡ニテ佐々

内蔵介ニ加勢シテ軍功有リ

一元龜四年越前金ヶ崎陣ノトキ矢ニ中ル

一天正十六年小田原出陣

一文祿四年致仕シテ名ヲ玄球ト改ム

一慶長十二丁未正月七日卒 號

源庵常本大居士 小折村嫩桂

山久昌寺ニ葬ス

(以下略)

女子

初 何某弥平治ニ嫁ス 後ニ織田右府之

室トナリ尾州小牧ニ住ス

一 永祿九年寅五月十三日卒 號

久菴桂昌大禪定尼葬小折久昌寺